

竹川竹斎『護国の後論』（勝海舟関係文書85）（1）
―勝が参照した開国論者の海上防衛と交易政策―

岩 田 澄 子

Takegawa Chikusai's *Gokoku-no-kouron* (1)

IWATA Sumiko

【キーワード】開国論、勝海舟、小栗上野介

一、『護国の後論』（一八五四年）と勝海舟

前稿まで、伊勢の豪商・竹川竹斎（たけがわちくさい：一八〇九～八二）が嘉永六年（一八五三）の黒船来航直後に著した『護国論』をみてきたが¹⁾、本号から、翌年（嘉永七／安政元年）に著した続編をみる。

本書の射和文庫（いざわぶんこ：三重県松阪市射和町）所蔵本は『護国後論』であるが²⁾、国立国会図書館の憲政資料室に、勝海舟（一八二三～九九）旧蔵の竹斎自筆本が所蔵されており、その書名は『護国の後論』であることが判明した³⁾。すなわち、『護国後論』と書いてあっても、実際は「護国の後論」と呼んでいたと思われる。

また、竹斎は続編ができると真っ先に勝宛に送り、それが幕閣

で回覧されたことを考えると、国会本は射和本に負けない特別な価値があるといえる。そこで続編は、『護国の後論』（国会本、勝海舟関係文書85）を底本とし、現代語訳で紹介する。

『護国論』の時は漢文訓読のような片仮名混じりの漢字なので、翻刻原文としたが、『護国の後論』は平仮名（変体仮名）が多い古文書の文体で、原文では理解しにくい部分がある。そこで、古文書に馴染みのない方にも気軽にご覧いただけるように、力不足ながら現代語訳に挑戦する次第である。

不備が多々あると思われるが、『護国の後論』は全文の影印が公開されているので（国立国会図書館デジタルコレクション）、研究資料として活用される場合は、本稿を叩き台として直接影印をご覧いただき、お許し願いたい。

『護国の後論』は柿渋紙の表紙に紐綴りの装丁で、大きさは縦二五・七センチ×横一七・五センチ、分量は墨付六十八丁である。

二、『護国の後論』執筆の経緯と、『護国論』との相違点

竹川家は江戸・大坂・京都に複数の支店をもち、幕府御為替御用方ようかたを務める伊勢の豪商で、三家（本家・新宅・東）で構成されていた⁽⁴⁾。

竹斎は、東竹川家七代目当主の政胖（まさやす、雅号は緑麿^{みどりまろ}）で、二十一歳で家督を継いで彦三郎と称し、四十六歳で隠居して竹斎と称した。すなわち竹斎は隠居名で、実は嘉永六年六月に『護国論』を著した時はまだ「彦三郎」だったが、翌七年四月に二十歳になった嫡子に家督を譲って「竹斎」となり、七月に『護国の後論』が著された。

続編の執筆は、『護国論』を読んだ新当主の政悌（まさよし）が、「では、外国人とどのように付き合えばよいのか。」と質問してきたのがきっかけだという。そこで竹斎は、海外交易を不可としていた『護国論』の説を見直し、一転して、交易による利潤によって軍備拡充をめざす内容に改めたのである。なお海上防衛に関する部分は、必要経費の算出基準が異なっている以外は、『護国論』と概ね同じ趣旨である⁽⁵⁾。

続編でも、竹斎は『護国論』の時のように、中国や日本の故事を多数引用しながら、為政者や武士の心得などを説き、交易に関する商品情報を項目ごとに解説し、最後に、軍備に関する専門用語を和訳する必要性を論じている。

三、『護国の後編』の読者

『護国論』（一八五三年）は交易拒絶の攘夷論で、外国船は打ち払うべきとしていたが、これは開国論ではなかったからこそ、

攘夷論者の孝明天皇の内覧を得るなど、朝廷でも注目されたといえる。そして前稿で紹介したように、竹斎の『護国論』は、別称『口真似双紙くちまねそうし（護国論 上）』（三巻）として本願寺の歴代宗主が収集・伝持した写字台文庫（龍谷大学図書館）にも所蔵されている⁽⁶⁾。

一方、幕府は黒船来航の翌年（一八五四）三月に日米和親条約を締結し、日本は開国して港を開き、アメリカに対する燃料や食料・水の補給が可能になったが、世上は「攘夷か、開国か」で激しく対立していた。『護国の後論』執筆は和親条約締結から四ヶ月後のことである。

開国論に転じた続編をみた勝は、読ませる相手を厳選した。勝が選んだ読者第一号は、勝の上司で「当代随一の人物」と評する海防掛目付の大久保忠寛（一翁…一八一七〜八八、のち第五代東京府知事）である。一方、同じく「大久保」なのでまぎらわしいが、前年に『護国論』の幕閣や朝廷への紹介者となった勝の門人・大久保喜右衛門（生没年不詳、のち京都町奉行、浦賀奉行）は、『護国の後編』を読ませてもらえなかった⁽⁷⁾。

その後、安政七年（一八六〇）三月三日に、日米修好通商条約（一八五八年）の締結に関与した大老・井伊直弼が、攘夷を唱える水戸藩士らに殺害される桜田事変が起きる。しかし、竹斎はそれにひるむことなく、さらに同年七月に『老翁雄言』（おじがおたけび）、文久元年（一八六一）に『賤廼雄話』（しずがおたけび）を著して、攘夷論者を臆病者とよび、果敢に開国を唱えたのであった。

このように、『護国の後編』は朝廷では参照されず、読者は限

られたが、幕府の経済政策を担う勘定奉行の小栗上野介忠順（一八三七～六八）にも注目された^⑧。慶応二年（一八六六）竹斎は小栗に幕府特命大使として招聘されて江戸に三ヶ月近く滞在し、小栗に財政・貿易に関する諮問を受け、外国米の輸入、蝦夷地の開拓、鉄道の敷設、海軍の整備について建言し、帰りは大坂で老中の小笠原老岐守長行（一八二二～九一）と会談している。

ところが慶応四年（一八六八）閏四月に小栗上野介が殺害され、同年十月に江戸幕府が崩壊した。しかも小栗は、明治新政府により「逆賊の幕臣」とみなされていたため、これらの竹斎の功績は従来の幕末史ではほとんど知られていない。

しかし、開国論に転じて論述し、幕府の海防掛だけでなく、老中や勘定奉行にも注目された竹斎の言説は、みておく意義があると思われる。

四、『護国の後編』の概要

『護国の後論』には、『護国論』にあったような「目次」がない。さらに、句読点や改行・空行もなく、文字が延々と連続して記されている。そのため、文章の区切りも不明瞭で、全体像が把握しにくい。そこで便宜上、本書の概略を示す目次を作成して示すことにする。

- 1 まえがき
- 2 序章
- 3 アヘン戦争と中国の歴史
- 4 外国人（外夷）といかに付き合うか
- 5 幕府海軍の構想（軍備・人員と経費）

6 神足歩行術

7 十種の賜りもの（日本の商品情報）

- (1)米、(2)酒、(3)味噌・醬油、(4)茶、(5)衣服、(6)紙、(7)漆器、(8)磁器、(9)たきもの、(10)雑貨

8 終章

9 西洋砲術の稽古にオランダ語を使うことについて

この目次に従い、本稿では、1 まえがき、2 序章、をみる。

1 「まえがき」では、続編の『護国の後論』を著した経緯が記される。『護国論』執筆の翌年四月に隠居した竹斎は、病気が快復して自由時間が豊富にあり、念願だった射和文庫を開設し、人と語らう機会も増えたという。

そこで、『護国論』を読んだ新当主の（政よし）に、外国人との付き合い方について質問される。また、竹斎の二人の弟（竹口信義、国分信親）は、近隣にある豪商（竹口喜左衛門家、国分官兵衛家）の養子となりその当主を務めるが、その二人からも質問や相談を受けて、竹斎は昔や今のことを物語ったが、それが面白かったので、忘れないように書き綴ったものがこの書だという。ただし、本書は政よしが記録者という体裁になっているが、それは竹斎が遠慮しているからで、実際は竹斎自身が書いたものといえる（勝も、竹斎自筆本と認識している）。

ところで射和文庫は、竹斎が私財を投じて、一万巻あまりの書物を集めて開設した、私設図書館の草分け的なものである。その目的は、（勝のような）自ら考える力を持った優秀な人材の育成で、読書により幅広い知識と教養を身につけることが重要と考え

たからである。この理念は貴顕の共感を得て、『護国論』を読んだ権大納言の一条忠香（のちの左大臣）ら三卿をはじめ、大久保一翁や勝海舟からも「射和文庫」「射和書院」などの書（扁額）が贈られている。

2 「序章」では、嫡子（政よし）の質問に答える形で、竹斎の考えが示される。『護国論』では外国船は打ち払うべきという攘夷論だったが、これは鎖国を前提とした考えで、士気を高めるためであった。しかし、これは古来の掟ではなく、外夷入港の禁が甚だしくなったのは家光の頃からであり、飛鳥時代の推古天皇を例にあげて、外国と良好な関係を結ぶ利点を説いている。

また、戦乱のない和平が続いた結果、武士は文弱奢侈となりやすく、実武を忘れて虚武となっている者が多いという。竹斎は、武士としての内実が伴わない者を「銅や鉛のメッキ（鍍金）武士」とよんで批難する。幕府の高官が家柄によって決まっている現状については、武士を金貨にたとえて、「位は尊いといっても、世上通用はその価に値しないことがある。これは乾字金の如し」、「文学・武芸を共によくしても、国家経済の政治に通じていない者は、当世の大判金の如し。大礼の献物には欠かすべからぬ要物だが、世上通用は益となる事は難しい」という調子で、興味をそそる比喩を用いて解説するが、新設の海上防衛（幕府海軍）においては、家柄に関係なく、やる気のある優秀な人材を選ぶことが肝要、と説く。

そして、民衆への配慮にも目を向ける。新たな軍備整備には財源が必要だが、その負担を民衆に押し付けて厳しく虐げると、国家の存亡に関わる一揆や反乱につながる可能性があるため、遠大

な配慮が必要だと指摘するのである。

「序章」の終盤に、竹斎は突然、自分のことを「田畝の一人である賤奴」と卑下しながら、話は「無益の長い物語に及ぶ」と言う。その理由は、吉田兼好が『徒然草』で言っているように、「言うべきことを言わないと、腹がふくれるからだという（原文は「いふ事いはぬは腹ふくるるわざにあれば」）。

このように、「腹がふくれないように、言いたいことを言う」と宣言された『護国の後論』は、実質的には建白書でありながら、異例の長文の物語となっている。しかし、日中の故事やアヘン戦争後の中国の状況を踏まえて現状を考察した分析や、海外交易を前提に再考された海上防衛構想や詳細な商品情報は、『護国論』より一歩進んだ実用書として、幕閣で注目されたといえる。

五、『護国の後論』の人脈的な背景

ここで幕府御為替御用方^{おかわせごようかた}についてみておくと、これは特権的な両替商といえる存在で、三井組（三井三家で構成）と十人組（実質五家で構成）からなり、竹川家は享保十一年（一七二六）から十人組の一人であった⁹⁰。

江戸店もちの豪商を多数輩出した伊勢商人は、松坂商人（紀州藩と射和商人（鳥羽藩）に分けられるが、射和（射和・中万地区）は松阪市の中心部から十数キロほどのところで、現在の行政区分はどちらも松阪市である⁹¹。

松坂商人の筆頭にあげられるのは三井家で、高利（一六二二～九四）の時代から当主は地元に住んで活動していた。そして射和商人の竹斎も、二十一歳で当主となって以降、隠居後も、国分家

などがある射和に在住し、江戸・大坂・京都の支店などからの情報を収集し活動していた。なお、商家に生まれた竹歳が、読書を好み博学なのは、外祖父（母の父）が著名な国学者の荒木田久老（伊勢神宮内宮の権禰宜）で、叔父の荒木田久守に薫陶をうけていたことが少なからず影響していると思われる。

最後に、勝海舟と竹斎の関係を確認しておく。竹斎は黒船来航の三年前（嘉永三年）に、江戸で活躍していた弟の竹口信義の店で勝と出会い、意気投合して書簡などで意見交換をしていた。勝は黒船来航の直後、すなわち竹斎の『護国論』と同時期に、幕府に建白書を提出して幕臣となるが、青年期（幕臣になる前）の勝を巡る人脈として、次のような全国的な豪商ネットワークがあったことに留意しておきたい

函館 渋田利右衛門

摂津灘 嘉納治郎作

伊勢 竹川竹斎・竹口信義の兄弟

紀伊 浜口儀兵衛

慶応二年に竹斎が小栗上野介に江戸へ招聘されたのは、小栗にも通じていた灘の嘉納治郎作（講道館柔道の創始者・治五郎の父）の仲介によるものであった。さらに、竹斎は慶應三年五月にも江戸下向途中の小栗に呼び出されて、桑名で面会して意見を述べており、竹斎は小栗の政治顧問だったといえる⁸⁾。

黒船来航の翌年、竹斎はどのようなことを言っていたのか。これから数回に分けてみていくことにする。

《参考文献》

- 1 拙稿「竹川竹斎『護国論』(1)～(6)」（当紀要十六・二十二輯）。
- 2 竹川竹斎『護国の後論』国立国会図書館憲政資料室蔵（勝海舟関係文書84）国立国会図書館デジタルコレクション。
<https://dl.ndl.go.jp/pid/11222639> (2026.01.31閲覧)
- 3 『射和文庫蔵書目録』竹川竹斎翁百年祭実行委員会（一九八二）一〇三頁。射和文庫には、『護国後論』の写本が二冊（二種類）所蔵されている（分類番号XIV-5、6）。三重県飯南郡教育会編『竹川竹斎翁』株式会社秀英舎印刷、大正四年（一九一五）。
- 4 竹川竹斎生誕二百年記念事業実行委員会編『竹川竹斎』、同『幕末のチャレンジャー・竹川竹斎』光出版印刷（二〇〇九）。岩田澄子・田久保國子編・大久保治男監修『新史料が導く桜田事変―豪商・竹川竹斎のビッグデータを読み解く』サンライズ出版社（二〇二二）。
- 5 金澤裕之『幕府海軍の興亡―幕末期における日本の海軍建設』慶應義塾大学出版会（二〇一七）二一～二二、二九、四九頁。
- 6 竹川竹斎著『口真似双紙（護国論上）』三卷（写字台文庫：581-3-W-3）龍谷大学図書館貴重資料画像データベース。
<https://da.library.yukoku.ac.jp/page/170049> (2026.01.31閲覧)
- 7 松浦玲「喜右衛門と右近将監」（一九八二）勝海舟全集第二卷、月報21、講談社。
- 8 松浦玲『勝海舟』筑摩書房（二〇一〇）四九～七八、三〇

九〇三一二頁。上野利三『幕末維新期 伊勢商人の文化史的研究』多賀出版（二〇〇一）。

9 『三井両替店』（一九八三）株式会社三井銀行『三井両替店』編纂委員会発行、二三九～二四〇頁。なお、竹川家は鳥羽伏見の戦いのあと、幕府からの預かり金（御為替御用金）を新政府軍に没収され、事実上倒産した。

10 吉田悦之編集『宣長の目「松坂の魅力」——本居宣長についての25』松阪市まちづくり交流部観光交流課（二〇一三）二～三頁。

11 童門冬三「政治顧問・竹川竹斎」『江戸の怪人たち』（一九九五）集英社文庫。『竹川竹斎』（前掲4）

現代語訳 竹川竹斎『護国の後論』

〈凡 例〉

・竹川竹斎『護国の後論』（勝海舟関係文書84、国立国会図書館デジタルコレクション）を底本とし、『竹川竹斎翁』（一九一五年）に掲載される射和文庫蔵『護国後論』（護国論後編）の翻刻と校合した。

・便宜上、『護国の後論』の白紙部分を除き、墨付一丁表・一丁裏・二丁表・二丁裏の順に、西洋数字で丁数を示し、漢数字で頁番号をつけた。たとえば「5（九）」は、墨付き五丁表で九頁であることを示す。『護国の後論』の分量は墨付六十六丁（一二三頁）である。

・便宜上、【見出し】、読点、句点、並列点を付した。

・本文中に二段組で示される割中は、（ ）内に記した。
・適宜、カッコ（ ）内に原文の表記、注釈を付記した。

〔表紙〕

竹川竹斎

護国の後論

〔1 まえがき〕

【続編執筆の経緯】

1（一） 長年（としころ）の病氣（いたつき）も、この頃は少しおさまり、寝込むほどではなくなりました。この二月（如月）に彦三郎政悌（まさよし・竹斎の嫡男）が江戸と大坂（浪華）の務めを終えて帰ってきたので、（私は）家督を譲り、世間から遠ざかりました。暇があるものですから、世の役に立ちたいと思う事が沢山あったので、文庫の書をはじめ、何やかにやの事を打ち捨ておいたのを、心が向く折々に取り出して調べたりしながら、日が傾けば庭（前さい）に出て、鉢の朝顔や蘭などに水を注ぎ、心を養うのを身の業としていました。しかし近頃はひどい地震（ちいふり）があり、また所々に木の実（月桂子）が降り、あるいは月の満ち欠けがあらぬ形に見え、あるいは日の影が二つ出ていることなどにつけて、世間の人はとても（二）心畏れて、種々（くさぐさ）のあらぬ事々をいうのも聞き苦しいので、昔からあった事などを書き出して、何のしょうもない事などを論し、あるいは弟の竹口喜左衛門信義が最近始めた事業のことを聞いて助言をする事もあり、または、末の弟の国分勘次郎信親がこの里を治める事について問う事などを論し、また政よしから、家を治めるべきこと、自身の務めるべき事などを問われました。

そこで、私が若かった頃、亡き父である政信（まさのぶ）顕道居士がとても厳しく教え諭されたことを守って怠らず、身を慎み、人の浮世にかわってなした事などを物がたり、また亡父が、勤めに功があることに触れることは益がなく、「一年の利を欲すならば穀を植よ。十年の利を欲すなら、

2 (三) 木を植えよ。百年の利を得ようと思うなら徳をつとめよ」という事を折々おっしゃっていたことや、「宗家の衰耗の時に遭遇し、家風を昔に戻した」とおっしゃっていたのを言い聞かせたりして、日を送っていました。

するとある日、いつものように蘭や蓮に水をやり、縁側にでて、次の当主である政よしに茶をたてさせ、政よしと話をしていると、外国人（蝦夷）の事になり、「今年アメリカがやってきて、この末どうなるのか。去年の東流翁（〓竹斎）の護国説に似た、国を富かにして世を穏やかに治める道はないのか。世にでて相当の地位に立つ尊い御方々ばかり、この末どうなるのか」と、政よしが問う。

思う事を條々語り始めた頃、庭の枝折り戸を打ち開いて来る人を見ると、去年（四）私が病を聞いて、後は便りがなかった緑陰軒の東流翁（〓竹斎）だったので、とても珍しいと感じて、簀子（すのこ）に円座を敷いて、茶をたてて話をすると、翁がいう。

去年から問うべきだったが、門を出るのも物憂く、「いつかは、いつかは」と思いながら、今まで一年ばかりも問わずに過ぎてきた。しかしちょうど今この春、我が子が二十歳になったので家督を譲り、後の世のために、若い時より心をとめていた、万巻の（書を集めた）射和文庫をたて、射陽書院を営み、民のために社

倉を建てて、若干の米を施し、新たに民の家十軒を建てようという計画も成し終わった。国（鳥羽藩）の殿にもお目にかかり、子孫（うみの子）の末までも御恵を賜り、蝦夷の事について誠実な志を表したことで、殿より

3 (五) 茶の湯の器（うつは）などを給わったこと。二十歳より後の二十五年、世子たちは思うことをなし終え、さらに身の病氣（いたつき）によって殿にもねぎらわれ、身の務めもお許しされ、このようにふりざまをも変え、世を逃れたことまでも人伝えに聞いた。いよいよ私も同じ世で用なき人となったので、「さあ、また世の役に立たない仲間（益なきどち）で、益なき話をしよう」と思いおこして、今日は問うたと言うのに、人氣が稀な隠れ庵に友を得てとても嬉しく、昔や今のことをなにくれと語り合っていると、政よしが先に問うた事がまた出て、翁に聞いたら、翁がその條々を説くのがとても面白かった。

そこで、（弟の竹口）信義や（末弟の国分）信親をはじめ、他の人にも語るうちに、忘れてしまったこともある物語を、忘れないうちに心覚えをして、（六）（竹斎は）暇な時に書いていると疲れると言うので、（嫡男の）政よしは筆を取って解決し、後であと先を綴って、また黄金の数も考え合わせて書き綴らせたのがこの双紙である。物語るのとは名もない者で、先の書名からみると、「護国の後論」といふべきであろう。

嘉永七年寅の年 七月晦日に翁（〓竹斎）が來た後に
閏七月五日に、このように言うのは

竹川竹斎のあるじ 緑麿政胖しるす

〔2 序章〕

【嫡男・政よしの質問】

4 (七) 一、政悌（まさよし）が言う。

「去年のあなた（翁Ⅱ竹斎）の論は、外国人（外夷）の上陸を禁じ、中国（から）とオランダ以外は交易を許さないという主意で、北条時宗が元の祖・クビライ（忽必烈）を絶したように打ち払い、万世に勇名を残し、外夷の魂を押しつぶし（とりひしぎ）、海内を航海して国を富ますという論である。しかし、外夷に我が国（の土）を踏ませないというのが古来の皇国の掟とは聞いていない。また、貢ぎが入るのに、それを受けないという綱紀も聞かないが、その事にもまた翁の考えがあるのか」と問うと、翁（Ⅱ竹斎）が答えている。

「そうである（然り）。はかりごと（謀）は、敵を知り、自分（己）を知って、万全となるよう謀ることにある。自分の国を空虚にして、みだりに武器（干戈）を動かし、敵国をうつのは、たちまち亡国となるもとで、近世の武田勝頼の類である。

【去年『護国論』で論じたこと】

外国人（夷狄）にわが国を踏ませないのを主とする（八）とき、（それが）去年私が論じた護国の道であった。（すなわち）、

十年で三百万金の財産を失うことから救うのには、（軍備は）五十艘の軍艦、五艘の蒸気船、千門の大砲（大煩）、七百門の中砲、一万二千七百門の小砲、八十万丸の大小の弾、五十万貫匁の硝酸カリウム（焰硝）、十七ヶ所の常平役所、百六十の大倉、二百万石の積穀、一ヶ所の大軍鑑役所で足りる。そこで北海道（蝦夷）の諸島や小笠原諸島を開拓して利をおこし、人口を繁殖（蕃息）

させることは容易である。又、外国人（外夷）の計略（はかりごと）については、わが国を謀り国勢を隆盛させることもまた道であろう。これは優れた良相がなすところである。

去年論じたことは、我が国が鎖国している前提で、他を顧みない論で、勇武血気にはやる壮士として、その志を伸ばそうとしたためである。

5 (九) 政よし（堅子）の言う事をきくと、和平を好むのと似ているが、和平を好むにも道がある。「自分（己）の国が空虚なので、和平を好んでいる」と敵が思う時は、金や元の夷共が宋（から）を望んだように、いつまでも（飽く時なく）「隴（ろう）を得て蜀を望む（望蜀…一つの望みをとげて、更にその上を望む）」状況に至り、限りある物を求める外夷数十国の限りなき欲をみると、（国を）閉めることはできない。天下の事は、江戸・大阪の繁栄も利のために大きなことである。天下は嬉々として、皆が利のために来て穰々として、皆、利のために行くことは、和漢古今、皆その通り（然り）である。外夷が我国に来るのも、この他にはないであろう。それ故に、彼のその欲が満ちていない時は、必ず武器（干戈）を取ってでも望みを叶えようと謀るであろう。その時、黙々としてその命令に従うときは、実に国威を汚し国体を損なう上に、国脈は（一〇）たちまち衰耗するに至るであろう。

足利代々の将軍は、征夷大將軍たる身を忘れ、西夷である明の主に進物を入れて封を受け、我国を辱めた事は、三才の小童もその言う事を恥じるほどの悪名を得て、その罪が軽くなることはないであろう。

【鎖国は、古来の皇国の掟ではない】

そもそも、外夷入港の禁が甚だしくなったのは、大猷院・家光將軍の御時からと聞いた。豊臣秀吉公（豊公）がキリスト教（耶蘇）を禁じたことに始まるというが、島原の乱（肥前嶋原の役）の後、御朱印船であっても外洋に出る事はなく、外国人（夷狄）を拒絶するという令厳で、沿海に至れば打ち潰すという令だった。しかし近年（近歳）は薪水を与え（給い）、外夷に愛憐を加えよ、という令もある。そうであれば、これは神祖・東照宮の御掟でもあると思われる。又、

6（一一）推古の皇法を以て試みに言うならば、外夷化を慕い、入貢するのは悦ばれるところで、貢物をして諸陵にも差し上げさせる事は、国史に見える。そうであるならば、外夷が我が国の王化仁憐を仰ぎ、富が有るのを慕い、貢を奉られるなら、それを諸陵にも奉り、深い恵みを受け服従して来るのを歓ぶようになるであらう。又、外夷が奸計をもって我が国を窺う時、神武がこれを制する事が困難でないなら、入貢を拒まないようになるであらう。

【長年の和平と文弱奢侈】

慶長以来、武器を伏せて柔和温順の風儀で天下を治めようとする方針（遠謀）で、文事を盛揚した。既に六代將軍家の頃には、列侯諸士は勿論、僧徒の為にまで自ら経書を講じられるほどで、文教が（一二）大いにひらけ、不法の一向宗の坊主すら、武を捨てて柔和忍辱の徒となり、文化の徳は大なる事であった。日本と中国（和漢）は昔より、当世のような十全十美の泰平を有りがたがるべきである。これは家康様（東照宮）以来、代々賢聖の君がでられて文教を大いに開き、執政の諸英・朝廷（廟堂）は深謀議

論をなされ、撫御仁政（ぶぎょじんせい）（思いやりのある政治地盤。射和本は「仁

政撫御）が厚いからである。それゆえ、年々戸数人口が増えたことは夥しい事で、隣国が望んで鶏犬の声がきこえ、万民がその俗に安心してその業を楽しむのは、仁徳・延喜の聖代でもこれに増す事はない。しかし、是・非の二つの道を百年貫くのは難しいことである。その中に百年不変の非はあっても、これに至って時世につれ（政事の上をいう）、沿革があつて、是が非

7（一二）となり、十年の必是は少なく、武器を伏せ学問を修めること（偃武修文）が治平の基というのは、もっともな事であるが、ややもすれば文弱奢侈が誇大する弊害（弊）を生じる。ついには騎虎の勢い（途中で止められなくなる事）となり、実武を忘れて虚武となり、百姓よりも義勇の言行を聞かなくなって久しいので、死に勇むという勇者はなく、武器（干戈）の事を聞いても、戦々競々として命を惜しむ事だけを言つて、義に勇むことを聞かない。稀には武士のやつら（やから）にも商人に劣り、貨財を蓄積するのを主とし、利のみに走り、卑劣の言行の人もあると聞く。

【メッキ（鍍金）武士】

外見は勇気を張り、長き刀を帯し意気揚々であれば、武士であることに疑いないといえるが、これらはメッキ（鍍金）武士で、心中は市井の小民にも劣る（一二四）銅鉛のやつらである。

故に、そのやつら（輩）を虚武と言わずして何と言おう。太平の世が瓦解する事が速いのは、メッキ武士がいるからである。戦争の世の中では人えらび（選挙）が嚴重なので、人は皆純粹で、メッキ武士は一人もいる事なく、メッキのやつらは田畑の富に鋤や鋤を持って、メッキ気を捨てて立つので、銅は銅、鉛は鉛と明

らかに見えれば、その銅鉛武士は又、鍋・茶罐ともなるし、鉄砲玉ともなるまでで、誰も刀や剣の飾りにしなければ、もし戦争が速やかに起こっても、純粹金鉄の武士がこれを制するので、金銀の国家は瓦解に至らない。

【武士を金貨・銀貨に例える】

太平はこれに反して、金銀のあとつぎ（嗣）にさえ銅鉛が出る事がある。浅野家の大野九大夫（注…忠臣蔵の不忠臣。歌舞伎での名は斧九大夫。射和本は大野九郎兵衛。九郎兵衛が正しい）や、仙石家の仙石左京のやつらである（注…仙石騒動は江戸時代三大お家騒動の一つ。射和本は右京。左京が正しい）。あたかも慶

8（一五）長銀と実字銀の如く、一錠の銀といっても、四実銀に至っては、百匁のうち銀はわずか（僅）二十匁で、銅は八十匁である。又、代々純粹の金といっても、漢学の文火（注…「武火」に対して火力が弱いこと）で仁練が甚だしい時は、子孫はついに些細柔弱となり、位は尊いといっても、世上通用はその価に値しないことがある。これは、乾字金の如し、である。

又、文学・武芸を共によくしても、国家経済の政治に通じていない者もいる。これは当世の大判金の如し、である。大札の献物には欠かすべからぬ要物だが、世上通用は益となる事は難しい。

ここに銅・鉄たるものがあって、下が苦しむときは、一時、乾金大判をも切り裂くに至るであろう。

【中国史にみる国の栄枯盛衰】

人が太平に慣れると、奢侈柔弱に至るのはすぐ（忽ち）である。秦の始皇帝は、六国を（一六）亡ぼして十二年ほどで死んだが、翌年、早くも陳勝（反乱指導者。原文は「陳涉」）の一叫の声に

天下が響くように応じ、函関の旗（旌旗）をこっそり盗みに（目を掠めて）来たのに、英勇の一人も出て防ぐ事はなかった。

唐の玄宗は、業績を為した主君であったが、英志もまた奢侈誇大の心を生じる事も多く、世の人は奢侈に化し、忽ち武をわすれる。四十年太平の天子といっても、天実の末に契丹との戦いがあり、二十年も経たぬうちに、漁陽において太鼓の音（鼙鼓）で地を動かして来たので（注…安祿山の乱）、皆、手足のおきどころ（措）を失い、狼狽して瓦解し蜀に走った。武器（干戈）を見ないのが十年余りで、はや文弱奢侈に移っていった。しかし、これは四十年の治平で武器をとった人は皆変わったから、などと

9（一七）いうが、三国の時、玄德（注…劉備）が蜀で死んだ後、数年は（寂として）ひっそりして声がなかったが、魏国は早くも備預を忘れることはないのので、にわか（卒）に孔明（注…諸葛亮）が出たと聞いて、^左龐右・^右祁山をはじめ、朝廷も在野も共に甚だしく恐れて畏まり（恐懼）、^三郡はたちまち孔明に降参したことを思えば（注…祁山の戦い）、戦中に選ばれた武士でも、三五年で早くも何もせずにはぐらぐら暮らすこと（安逸）になるのは速やかである。

去年私が論じたのは、国を富まし民を救うことだが、外夷を打ち払うに至っては、武器をとることで夷を皆殺し（^{みなころし}鏖）にしたら、国の費用もまた大きくなる。

【虐政は一揆を引き起こす危険性あり】

今の世、諸侯の事を聞くと、米倉が満ち足りるのは稀で、去年と今年は海防のため、非常に苦しい状態（極窘）に至るものもあると聞く。極窘の諸侯以上は、武器を（一八）浚るときは、何を以て

戦争武備を整えるべきか。砲銃・刀鎗はその貯え（儲）があるといっても、金銀・米穀の蓄えがなければ、勇も智も施す所はないであろう。

施す所がないといっても、公道の厳責があれば止む事を得ず領民を虐げ、米・金を強取して、その備えをなすほか（外）はない。この上、領民を苦しめ、金銀を虐げることが頻繁な時は、民のみならず役人（吏）も苦しむ（困しむ）であろう。役人も民も苦しむときは、乱を思うものが有るに至るであろう。たとえ外夷が退帆しても、前後の諸侯が疲弊のために苦勞する事があれば、百姓はその役に我慢できないであろう。その時に又、外夷が万一、武器を取って攻め込んでくるときは、忽ち国中に乱が生じるであろう。近い清国（の例）

10（一九）で考えると、存亡の勢いは顯然と見るべきである。これらはその大略で、乱により様々の難がおこる事は、清国の行動の決起を促す檄文（檄）の如く、辞を以て述べるのは難しい事もあろう。

泰平の世に奢侈驕慢に至るのは、火が燃える如く自然の勢いである。これにより、財が費える事が年々加倍し、国内の産物が増す事はないため、上も下も衰耗し、財用に苦（窘）しむ事も自然（の流れ）である。

その上に賦税を厚くし、金銀を剥奪するに至る時は、国民は衣食に困窮し、人倫五常（注・仁・義・礼・智・信）を守る事はできず、ついに（終に）厳刑を恐れなくなるのもまた自然の勢いである。大国といっても、今日の財要に困窮する時は、上下一致に至りがたい。一致しなければ、武備を厳整にする事は（二

〇）できない。

一致しないことで恐るべき事は、秦の武安君が楚国の事を言ったように、国が大きいことを頼りとして、その政治を憂慮する（恤）主君が家臣（臣相）を妬むため、功を以てこびへつらう（諛諂）者を用い、良臣が斥疎せられる。百姓の心は離れて城池を修めず、自らその地で戦って、ことごとくその家をかえりみて、各々散心があって闘志がないので、忽ち楚の都にも攻め入られたという。

【腹がふくれないように、言いたいことを言う】

これらは、私のような田畝の一人である賤奴ですら深く心を勞する事である。まして御上には、執政諸侯より諸吏に至るまで、万人に一人を選ぶ英賢雲の如きものなので、各々遠大な深い配慮があるべきである。私が言うようなことは、主君のお供の者（扈從の輩）の茶話のようなものだが、兼好が言ったように、言うべきことを言わないと、腹がふくれる（原文・いふ事はぬは、腹ふくるる

11（二一）わざ）ので、（私の話は）無益の長い物語に及ぶ。

【護国の後論(1)】 終わり。以下次号。